



岸德平著作集 II

和歌文學研究

有精堂

山岸德平著作集 Ⅱ
和歌文学研究

著者略歴

明治二十六年新潟県西蒲原郡西川町大字曾根に生る。新潟県師範学校・東京高等師範学校・東京帝国大学国文科卒業。東京女子高等師範学校訓導、学習院教授を経て、東京文理科大学・東京教育大学・学習院大学・実践女子大学・中央大学各教授、東京大学大学院講師・実践女子大学学長を歴任。現在東京教育大学名誉教授・実践女子大学名誉教授・文学博士。
〔主要著書〕「河内本源氏物語研究序説」「懐風藻と日本文化」「校註枕草子」「堤中納言物語評解」「八代集全註」「日本古典文学大系」「源氏物語」「五山文学集江戸漢詩集」「源氏物語研究」(共著) など

検印省略

昭和四十六年十一月二十五日 初版発行

定價 四五〇〇円

著者 山岸 徳平

発行者 山崎 誠
東京都千代田区神田神保町一ノ三九

印刷所 株式会社 井村印刷所
東京都新宿区市ケ谷富久町一―三

発行所 東京都千代田区神田神保町一ノ三九
有精堂出版株式会社

電話東京(二九一)一五二―三
振替口座 東京四〇六八四番
郵便番号 一〇一

◇落丁・乱丁はおとりかえいたします。

和歌文学研究 目次

万葉集と上代詩	一
平安時代の文学と万葉集	二四
万葉より古今迄	五
歌合の起源及び古今集以前の歌合	八四
勅撰詩集と古今集の勅撰	一二
深養父集と千里集	一三
藤六集に就いて	一五
三条右大臣集と大和物語	一六
伊達家本古今和歌集に就いて	一六
内大臣家歌合と家長本古今集	二〇七
——新資料二則——	
十番歌合に就いて	二三
麗花集に就いて	二三〇
中世の女流歌人	二三八
——御形宣旨・郁芳門院安藝——	

古今六帖に就いて	二四一
漢詩集と勅撰和歌集との関係的背景	二五二
物名の歌と折句の歌	二七三
回文体の詩の書き様と回文の和歌	三〇七
和歌における度辞と押韻と八病	三二〇
集句の詩に就いて	三五三
杜鵑と歌	三八四
鎌倉の歌人	三九四
山家心中集に就いて	四一二
宗尊親王と其の和歌	四三九
近世における和歌研究	四五九
蜀山人の狂歌の師承	四八〇
所収論文掲載書一覧	五〇二

万葉集と上代詩

一 はしき

漢字を記憶してから、物の名を記し、更に文を作り、詩を作るようにと意欲が進展する。同時に又支那の典籍を読む読書欲も、旺盛になつて行く。読めば読む程、支那の典籍に親しみを覚えると共に、広い知識を学得して、知識欲を満足させる。況して、文化の程度の高い相手の学問や事物は、憧憬の心を以て、これに接触するの意欲を刺戟するのであつた。

かゝる結果、漢詩文が我が文学界に及ぼした影響も、実に莫大なものであつた。常陸風土記には、歌謡をすら漢訳して載せて居る。この如き態度は、作歌の上にも見られる。即ち支那の漢詩文の諸々の方面を応用し利用し、日本的創造とも称すべき、内容もあり、又、表現も少くなかつた。とに角、古人が、支那の典籍を読破した事の熱心と、その旺盛な研究的態度とは、誠に健羨に堪へないものが、多々存在するのであつた。

二 詠史と詠物と詠懷

詠史とは、歴史上の人物や事実を扱ひ、それに作者自身の、感懷とか感傷とか情感とか議論なども托したものである。文鏡秘府論には「……史ヲ讀ミ、古人ノ成敗ヲ見テ感ジテ之ヲ作ル」と記して居る。王沢不渴抄や、文筆問答抄や、本朝文苑筆体などにも、それと類似の説明がある。呂尙は文選の註に、「史書ヲ見テ其ノ行事ノ得失ヲ詠ズ」と

も述べて居る。

詠史の詩は、古くから存在した。明の朱止谿の撰した漢魏詩集の中にも、漢の部に亡名氏の詠史を載せたが、それは孝文帝の事を作つたもので、まだ感懷の要素が多い。故に詠史としての本質的なものは、魏の曹植の三良の詩などを古いものとすべきであらう。魏の王粲の詠史詩もあるが、いづれも、多少は諷刺的な性格を持つて居る。文選の卷廿一や古詩源卷七に見える左思の詠史詩八首などは、整正したものとしての古い作品であらう。詩体明弁卷二や古詩源卷九に見える、陶淵明の詠荆軻なども、詠史として知られて居るが、南北朝時代になると、顔延之の五君詠や秋胡詩九首が、これ等や文選や古詩源卷十などに見える。その後は唐の時代になるが、胡曾の詠史詩三卷は、黃帝から隋の煬帝までの事実として、七絶百五十首を詠んで居る。尤も、胡曾の詠史詩は万葉歌人に影響はなかつたかも知れない。懷風藻の中には、まだ詠史と題した部門はないが、藤原万里の「過神納言墟」や、「藤江守詠裨叡山先考之旧禪処柳樹」の作に和した麻田陽春の作品の如きは、詠懷的若しくは懷古的な要素が多いけれども、詠史的な作品とも見られる。それが凌雲新集になると、坂上今継は、詠史と題して陶淵明を詠じ、滋野貞主は、王昭君を詠じ、更に文華秀麗集になると、詠史の部立を設けて、史記竟宴に詠まれた排律と五律とを、都合四首載せて居る。經国集は現存するものが六卷で、他の十四卷は欠けて居るので、明確な点は知るを得ないが、恐らく詠史の部立は存在したものと、推測せられる。現存本でも卷十四の雜詠四の部分には、雜言で仲雄王の髡肩一首が載つて居る。即ち鴻門の会の樊会の事である。

とに角、漢魏六朝頃から、既に詠史の詩の存在が認められるから、我が国の和歌に、詠史若しくは詠史的の作品が、存在しない事はないと思はれるのであつた。万葉集には詠史と題したのではないが、内容から見て当然、詠史として取扱はるべき作品は見られる。かの卷二にある人麿の作品で、高市皇子や、草壁皇子即ち日並皇子や、明日香皇女や河島皇子などの殯宮祇候の時の作品は、懷古的ではあるが、たしかに詠史に属すべきものである。又、卷三に見える山部赤人が葛飾の真間娘子の墓の所を通つた時の作品や、卷九に在つて、高橋蟲麿の詠と称せられて居る詠水江浦

島子や、詠上総末珠名娘子や、詠過葦屋処女墓時や、詠勝鹿真間娘子や、見菟原処女墓詠などは、何れも詠史の作品に属して居るものであつた。更に、巻十六の有由縁歌の中でも、竹取翁を始め、伝説的な由緒を持つものは、すべて詠史の作品と見て差支ないものであつた。古代人には、歴史の真实性と虚構性とに対する弁別が、現代人に比較すれば、頗る漠然として居た。故に、現代人の科学的な思考からすれば、文学的要素の多いものであつても、古代人は歴史の真実として信じて居た。故に、奈良時代の末に成つたと伝へられる浦島子伝や、延喜時代に出た統浦島子伝記や、扶桑略記ですらも、浦島の事実を、真実な歴史として記録して来た。扶桑略記に拠つた水鏡は、淳和帝の天長二年に「今年、浦島の子は帰れるなり……雄略帝の御代に失せて、今年三百四十七年……」と記し、歴史的事実として取扱つて居る。

とに角、上代人たちは、歴史と文学との間に、明確な一線を引く事を考へて居なかつた。されば、浦島にせよ竹取にせよ、その他の伝説若しくは民譚も、歴史的事実も、等しく皆、歴史と見、歴史の範囲内において考究する事として居た。故に現代人には、それが民間伝承であり、伝説的な物語であつても、等しく歴史の真実として、これを扱つた。されば、それは詠史の作品としても、全く不都合ではなかつたのである。只、万葉集には、特に詠史の部立を設けなかつたに過ぎない。詠史と称しても、作品によつて詠懐的であるとか懐古的なものであると、自ら、雑歌や挽歌等、それを詠んだ場合などを考慮して、適当な部に編入せられる傾向はある。

要するに、万葉集には、詠史の部立なり項目はないけれども、実際には詠史と称せらるべき作品も存在するのであつた。

次に、詠物の詩を見ると万葉集には頗る多い。詠物とは、客観的に物の態とか状を詠じた詩で、詠月とか詠花の如く、詠何々と題するのが本体である。詩における詠物は、容易ではないとせられて居た。この詠物の詩は、詩経の中にも「灼々たる桃の花」や「依依たる楊柳」の如き例もあるが、これ等はまだ、詠物詩の萌芽とも見るべきもので、純粹な詠物詩ではない。無羊の篇などが、詠物詩の祖とも称せらるべきものであらう。その後、六朝に至つてから

は、ある一物を直接に対象として詠む様になり、詠物詩としての体裁を整へるに至つた。それが、唐に至ると李嶠が出て、詠物詩を完成し、李嶠と元の謝宗可と明の瞿佑と三人は、詠物詩の三巨匠と仰がれて居るのである。その中でも、李嶠は詠物詩人の白眉であつた。その作品は、李嶠百詠又は李嶠百二十詠と称せられ、嵯峨帝の御宸翰があり、陽明文庫には御宸翰の断簡が残つて居る。唐にはまだ、儲光羲や鄭谷や崔鶯など、詠物詩人は必ずしも少いとはいない。それらの影響は、当然、懷風藻にも万葉集にも及んで居る。懷風藻中には、中臣大島の詠孤松一首や、文武帝の詠月一首などがそれである。凌雲新集になると、詠史と詠物とが現れ、詠物としては、詠桃花、詠桜花、詠雪などが見え、文華秀麗集には、詠史の部があり、詠物としては卷下に、「詠」の文字を省略して、単に、飛燕や舞蝶の如きがあり、経国集には、卷十一・十三・十四などの雜詠の中に、詠殿前梅花、詠庭梅、詠桃、詠桜、詠鬼、詠禁苑鷹生雛、詠燕、詠雪、詠塵の如き題が認められる。この凌雲集以下は、平安時代に入つてからの勅撰の詩集であるが、翻つて万葉集を見て行くと、到る処に詠物の歌が現れて居る。今試みに、卷十を開いて見れば、春の雑の歌の中だけでも、詠鳥、詠雪、詠霞、詠柳、詠花、詠月、詠雨、詠河、詠煙などが見られ、春相聞の中には、寄鳥、寄花、寄霜、寄松、寄雲などが見られる。他の卷々にもこの例は多い。この「寄物」は「寄物詠」即ち「物に寄せて詠ず」の略された形で、詠物と同じであるが、表現が詠物と異なつて居るのであつた。その事は六義の条に掲げる事として此処には省略に従ふ。

次に、詠懷を掲げよう。

詠懷とは、情意を表出した作品であるから、抒情詩と称せらるべき本質を持つものである。故に、述懷とか言懷とか述志などの称呼もある。詩体明弁卷四には、述懷の項中に、詠懷や秋思の類をも掲げた。文鏡秘府論卷四には、「詠懷ハ、其ノ懷抱ノ事ヲ詠ジテ、興ズルコトヲ為ス、是レナリ」とも述べて居る。詩体明弁卷六には「懷思」とも言ひ、同卷五には「長安臥病、秋夜言懷」の様に、陳羽は言懷の熟語をも用ひた。若しこの詠懷が、杜甫の作品における詠懷古迹や、蜀相や、李白の鸚鵡洲や、崔顥の黃鶴樓や、許渾の凌歊台の様な類になると、懷古であるから詠史の

性格をも帯びて来る。

詠懐の詩も、その萌芽的なものは、詩経の中にも見出されるが、後漢の張衡の四愁詩などは、その類の纏つたものとしての、最初とも言ふべきものであらう。張衡は、順帝や安帝に仕へた人であるが、その後、桓帝や靈帝時代の鄺炎にも無題の詠懐の詩が二首存在する。一首は賦で他の一首は興である。然し、表面から詠懐と題を掲げた作品の最初のものは、晋の竹林七賢の一人なる、阮籍の作品に始まる。それはもと、八十余首存在したと伝へられるが、現在は文選卷二十三に、十七首載せて居るだけである。後周の庾信にも、詠懐はある。

この詠懐の詩は、我が懐風藻の中にも、見出す事が出来る。懐風藻には、述懐や言志などがある。釈道融の「我所思兮在無漏云云」の詩は、張衡の四愁詩を粉本としたものであつた。降つて凌雲新集になると、言志があり、文華秀麗集には、述懐の部を立てゝ居る。従つて、経国集の如きは、当然、詠懐の部は存在した事と考へられるが、前記の如く、何分、現存本は欠本であるから、それは見られないのである。下つて、本朝麗藻になると、懐旧と述懐との部立も現れて来た。

この様に、種々の術語が見られるけれども、すべて心緒を述べたものであるから、その内容は、哀傷や悼亡や閨怨や幽憤や憂憤となり、喜怒哀楽等の情感ともなり、多種多様に区分せられるであらう。従つて、詩に在つては、純粋に詠懐の部分に扱はれて居るものは、案外少いのである。

翻つてこれを万葉集に就いて見ると、正述心緒とか、寄物陳思とか、譬喩歌などの項目となつて扱はれて居る。卷十一は、特に右の如き項目を掲げて居るが、他の巻々でも、太宰帥大伴卿の故人を慕ひ給ふ歌三首(卷三)とか、憶良の古日を恋ふる歌(卷五)とか、防人の人達が、竹敷の浦に船泊した時、各々心緒を陳べて詠める歌(卷十五)とか、各心緒を述べ、各々懐を述べて詠める歌六首(卷十八)など、随所に見られるのである。

以上の如き、詠史、詠物、詠懐は、人情の自然で、何国の人々にも、当然詠まらべきものであらうが、項目の分類等に関しては、漢詩方面の影響なり暗示なりは、到底閑却する事が出来ない。殊に詠物、寄物、譬喩などに関して

は、六義に言ふ賦比興の觀念が採用せられて居る。その点などから考へると、一々の例は省くが、意外に深い關係が、上代詩と万葉集との間に存在する事が、推測せられるのである。

三 六義と万葉集

詩における六義とは、言ふまでもなく賦・比・興・風・雅・頌である。その前三者は、表現技巧の問題に属し、後の三者は表現の目的とか性格を示したものである。即ち風は諸国の風俗つまり国ぶりを歌つたもので、民謡的な性格を持ち、雅は政治や儀式に関するもの、即ち朝廷關係の事柄を扱つたもので、大雅小雅とか正雅、變雅等にも分類せられて居る。頌は宗廟を祀つたり、人君の徳を讚美するものである。故に、風・雅・頌の中にも、当然、表現技巧としては、賦・比・興が用ひられて居るであらう。さて、その作品の目的乃至は性格を示した風・雅・頌は別として、前三者賦・興・比を見ると、懷風藻の詩には、興や比は殆ど見られない。多くは賦的な表現になつて居る。然るに、万葉集中には、賦と興及び比に相当するものを、明確に區別して記して居るのであつた。即ち、卷七や卷十などに見る詠天、詠草、詠鳥、詠霞、詠河などの如き題は、前に掲げた詠物の詩に属するものであるが、この如き題の記し方のものは、大体は、賦としての表現様式を採つたものである。然るに、寄月、寄蟬、寄花、寄鹿の如き寄物の題のものは、大体、興又は比の表現を採つた作品である。勿論、多くの作品中には、詠物の中にも寄物的な表現を採用した作品も交り、その反対に、寄物の中にも詠物的な表現を用ひたものも、若干は混有して居る。然し本来は、明確に意識して、詠物と寄物とを區別したものであつた。譬喩の歌は、全く比の表現に従つて居る。今一二の例を左に掲げて見よう。

詠霞

冬過ぎて春來たるらし朝日さす春日の山に霞たな引く(十)

詠柳

浅緑染め掛けたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも(十)

右の如きは何れも賦の表現を用ひたものである。

寄 月

み空ゆく月読み男夕さらず目には見れども寄る由もなし(七)

寄 藻

潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き(七)

寄 霜

春されば水草の上に置く霜の消つつも我れは恋ひ渡るかも(十)

寄 雲

白真弓今春山に行く雲の行きや別れむ恋しきものを(十)

これらは、明確に興としての表現を用ひたものである。多くの中には、賦的であつたり、一部分が興的なもの、即ち、稍々旗幟鮮明を欠く如きものも、前述の如く混有せられて居るのであつた。

寄 玉

をちこちの磯の中なる白玉を人に知らえず見む由もかも(七)

寄 草

真玉つく越智の菅原吾れ刈らず人の刈らまく惜しき菅原(七)

この白玉と菅原とは、女に譬へたのである。故に全く比としての表現に従つたものと言ふべきであらう。譬喩と題した中のものは、一首の後に「……に寄せて思を喩ふ」と附記して居るから、寄物ではあるが、全く比の表現に従つたものである。

真葛はふ小野の浅茅を心よも人刈らめやも吾れ無けなくに(十二)

右……草に寄せて思を喻ふ。

いくばくも降らぬ雨ゆゑ吾がせこが御名のこゝたく滝もとどろに(十一)

右の一首は、滝に寄せて思を喻ふ。

この如き比とか興の表現に学んだ者は、古今集の歌人にも多かつた。そのために、古今集には賦に相当する表現は極めて少く、殆ど大部分が興的又は比的な表現技巧を用ひる様になつて居る。それが表現の智的技巧であり、悪くすると言語遊戲的にまで落ちて行くのであつた。今試みに、古今集における興的乃至は比的表現の、智的技巧をも左に略記して見よう。

恋ひせじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけらしも(恋一)

わが恋を人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ(恋一)

これらは賦である。この類は古今集中には、殊に恋の部には全く少いのである。

ほととぎす鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな(恋二)

音にのみ聞くの白露夜はおきて昼は思にあへず消ぬべし(恋二)

これらは興であるから、若し万葉集の作者ならば「寄あやめ草」とか「寄白露」と題する性質のものである。

はつかりのはつかに声を聞きしより中空にのみ物思ふかな(恋二)

夕さればいとど干がたきわが袖に秋の露さへ置き添はりつゝ(恋二)

などは比に相当する。然し、比にして興的な要素を含むものとか、興であつて比的な要素があるとか、賦にして興的な要素が、部分的に混入して居る如きものの存在する事もある。それは古今集の如く、智的技巧の進展した時代には、当然かも知れない。

要するに、賦は、純粹思惟なり、純粹直観の表現に属する作品である。興は類似の二物を対比した表現で、和歌では前半が、即ち大体、上の句が序となつて居る。比は全く他物に比喩したものであるから、表面の意味と裏面の意味

とがある。即ち表面だけで言へば、賦になるのが一般であるけれども、それは単に他物を借りただけで、真意は、その裏面の意味に存在するのであつた。それだけなのであるが、この解釈に關しては、周礼の大師職の註や疏には、鄭氏や賈氏が不徹底な説明を加へた。その不徹底が、毛詩正義や毛詩指説から、伊川詩解や横渠詩説や呂氏説詩記や朱子語類や、その他諸書に、屋上屋を架したりして、混乱に人を導いて居た。日本でも、伊藤仁斎は語孟字義、同東涯は弁疑録に、荻生徂徠は徂徠文集中の、對_ニ士茹問_トに、いづれも諸説を引用して、長広舌を弄して居る。然し、賦、比、興は、それ程難解なものでも何でも無い。真意を解さないと、諸説を紛々と引用し、引用益々多くして、内容愈々不明になるのであつた。とに角、賦、比、興の例を今、詩經に就いて掲げて見よう。古註と新註とでは、必ずしも一致しない所もあるが、文藝的からも表現技巧的からも見て、正しいものを掲げておく。

葛ノ覃(ノ)ビテ中谷ニ施(ウツ)ル コレ葉ハ萋々タリ。

黄鳥ココニ飛ビ、灌木ニ集ル ソノ鳴クコトハ啾々タリ。(周南の葛覃三章の第一章―賦)

関々タル睢鳩ハ河ノ洲ニ在リ。

窈窕タル淑女ハ君子ノ好逑タリ (周南の関雎五章の第一章―興)

螽斯ノ羽アル、詵々タリ。

宜ナリ、爾ノ子孫ノ振々タルハ。(螽斯三章の第一章―比)

葛覃は、全く叙景の境地である。有りのまゝを歌つて居る。万葉集ならば、たとへば

難波門を漕き出でて見れば神さぶる生駒高根に雲ぞ棚引く

などと同巧な詠みぶりである。関雎は、睢鳩が河の洲に仲好く並んで居る。それと同様に、窈窕たる淑女は、君子の良いつれあひであると言つた。和歌ならば前半即ち上の句が序となるのであつた。前記の「ほととぎす鳴くや五月のあやめ草」の類である。螽斯には、表裏の意味がある。即ち「バツタ」の羽のあるのが、詵々となごやかに集つて居る。かく群つてなごやかに仲よく集つて居るから、子孫の多数あるのも、当然であると言つたのが、表面の意味であ

る。表面だけならば賦となるであらうが、作者の視ふ所は、その裏面の意味にある。即ち裏面には、后妃は貞淑の徳がある。その福德によつて、子孫が衆多で繁榮して居ると、比喩したのであつた。

とに角この様に、六義の中、賦・比・興の表現は、和歌の上にも、根強く影響を及ぼして居るのであつた。

四 表現層と表現面とへの影響

支那詩文が、わが詩歌の表現層への影響には、明確なものと、不明確ながら関係があると認定せられる程度のものである。その明確なものでも、思想的な方面に関係する事は、偶然な一致とか類似も、勿論あるに相違ない。然し、今は明らかに関係ありとすべき類のもの若干を、左に掲げて見る。その一つには遊仙窟の文があげられる。遊仙窟は、言ふまでもなく、唐の張文成の作つた伝奇である。文成の伝は、新、旧唐書とも、いづれも張薦伝に附載してあるが、「其の文は、筆を下せば立ち所に成る」と賞して居る。その作品には、朝野僉載や龍筋鳳髓判などがある。市河世寧は、その中の詩十余首を採つて、全唐詩逸に入れた。支那には早くから湮滅したものであつたが、我が国にだけ残存したのを知不足齋叢書に入れてから、再び支那にも流布する様になつたものである。

さてこの遊仙窟の中、張文成が十娘の許から別れて帰る所に

行イテ二三里ニ至リ、頭ヲ廻ラシテ看レバ、数人、猶モトノ所ニ立テリ。余ハ時ニ、漸々ニ去ルコト遠ク、声沈ミ影滅（キ）エテ、顧瞻スレドモ見エズ。惻愴シテ去リス。

とある。これは、菅原道真が左遷せられて、京都を去る時に夫人を思ひ出し

君が住む宿の梢を行く行くもかくるまでにかへり見しはや（拾遺第六・別、大鏡）

とあるものと、類似の如くに称する者もあるが、これらは偶然な、意識しないで生じた類似に過ぎないと思ふ。因つて、今、明瞭に類似と思はれるもの、即ち、関係ありと認定せられるもののみをあげて見る。

張文成が十娘を恋ひ慕ふ条に、次ぎの文がある。

芙蓉ハ澗底ニ生ジテ、蓮子ハ実深シ。木栖ハ山頭ニ出デテ、相思フコト日ニ遠シ。未ダカツテ炭ヲ飲マザルモ、腹ノ熱スルコト焼クガ如シ。又ヲ吞ムト思ハザレドモ、腸ノ穿(ホ)ルコト割クニ似タリ。

芙蓉は言ふまでもなく蓮である。蓮子即ち蓮の実は、熟すると飛んで一二間走り、その時に発する音は、悲愴であると言ふ。蓮子は又、憐思にも通ずる。木栖は、昔の訓はアツサである。この木の実を、相思子とも言ふ。蓮子は、谷の底に在つて、相倚る物なく独り心を痛め、木栖の実、即ち相思子は、山頭に在つて、思を寄せて居る。その如く十娘を恋ひ慕ふ思に、腹は焼け、腸の穿れる事は、割くに似て居ると、堪へ難い情を述べた。それが利用せられて夜の程ろ出でつつ来らく度まねく成れば我が胸截(タ)ち焼く如し(四)

と詠みこまれた。これらは、本歌取ならぬ、本文取とも称すべく、その一言一句の利用によつても、遊仙窟の読者には連想の余地が広く豊かになり、又、既製の支那文学によつて、この一首に重みを加へる事にもなる。又

少時坐睡スレバ則チ、夢ニ十娘ヲ見タリ。驚キ覺メテコレヲ攬(サグ)ルニ、忽然トシテ手ヲ空シクシ、心中悵快タリ。マタ何ヲカ論ズベケンヤ。余因ツテ乃チ詠ジテ曰ク

夢中ニ疑ヘリ、是レ実カト、覺メテ後、忽チニ真ニ非ズ。

誠ニ知ル腸ノ断エナントスルヲ、窮鬼、故(コトサラ)ニ人ヲ調(ナヤマ)ス。

とある部分は、次ぎの歌に利用せられて居る。「腸ノ断エナントスル」は、前の「我が胸截ち焼く云云」と同じ意味になる。

夢の逢ひは苦しかりけり驚きてかきさぐれども手にも触れねば(四)

又、張文成の眉が或る夜かゆかつた事を、次ぎの如くに述べてある。

下官(文成ノ自称デアル)曰ク、昨夜ハ眼ノ皮臍(カユ)カリキ、今朝、好人ヲ見ル……。

とあるのは、後世に、「眉のかゆいのは、思ふ人に逢ふ前兆だ」と言ふ今日の俗説の根拠となつたものらしい。即ち張文成は昨夜、眉がかゆかつた。果して今朝は、自分の思つて居る貴娘等の如き、顔よい人に逢つたと言ふのであ